

## 産官学連携シンポジウム「次なる茨木へ。」

所員 泊 吉 実  
(地域創造学部教授)

茨木市の将来像を考えるシンポジウム「次なる茨木へ。」が2017年11月18日、茨木市、茨木商工会議所、追手門学院の産官学連携で開かれた。18年に茨木市が市制70周年、茨木商工会議所が創立70周年、追手門学院が創立130周年の節目を迎えるのを機に企画したもので、会場の茨木市立男女共生センター「ローズWAM」のワムホールには市民170人、追手門学院大学の学生94人が集まった。茨木市はどんな都市を目指し、どんな街づくりを進めていくのか、進めていくべきなのか。茨木市の福岡洋一市長、茨木商工会議所の合田順一会頭、追手門学院の川原俊明理事長・学長の3人のパネリストがそれぞれの立場から考えを述べ、参加者を交えて議論した。

コーディネーターを務めた筆者が、3氏の発言と参加者から寄せられた質問票、学生から提出されたレポートのポイントを紹介しながらシンポジウムを振り返り、街づくりについて考えたい。



### パネリスト

#### 1. 福岡洋一・茨木市長

「向こう2年間、人口は増えるが、その後は減少に転じると予測している」と述べ、「町を持続していくには、市民の皆さまに『住んで良かった』と思っていただける町、また市外の方々に選んでもらえる町となることが必要だ」と説明。そのうえで、主なキーワードを二つ挙げた。一つは「教育」。「茨木は教育レベルが高い。教育に惜しみなく投資をし、市の強みにしたい。川端康成も学んだ『教育の町』として対外発信したい」と語った。もう一つは第3の居場所「サードプレイス」(第1の居場所である家庭、第2の居場所である職場、学校のほかに、居心地の良い交流の場、コミュニティの核となる第3の居場所)。「市の中心部にある市民会館を解体、建て直すのに合わせ、周辺のグラウンドや公園などと一体的、面的に整備し、市民が集い、憩える場所にしたい」と述べた。また、「茨木は個性がない、高槻に負けているという声を聞く。どう思われるか」と会場に問いを投げかけ

た。

## 2. 合田順一・茨木商工会議所会頭

「情報技術の発達、グローバル化の進展によって、茨木市もこれまでにない大きな変化の時期を迎えている。パナソニックや東芝の工場、その関連会社が消えてなくなるとは想像もできなかった」と語り、茨木に進出する企業の変化に触れた。「彩都には阪急電鉄と三菱地所が大型物流拠点の建設を、資生堂が（国内27年ぶりとなる）工場新設をそれぞれ発表した。市街地のパナソニック跡地にはヤマトホールディングスが物流拠点『関西ゲートウェイ』を開所した。新名神が神戸までつながれば市内の渋滞も緩和されるだろう」と言い、利便性という強みを生かし、「住みやすく働きやすい町」を目指してみなさんと力を合わせたいと語った。また、「JR 茨木駅に新快速をとめる運動」に言及し、「とめたくなる魅力が必要。市内には七つの大学があり、街づくりをリードできる人材育成を担ってほしい」と述べた。

## 3. 川原俊明・追手門学院理事長兼学長

（追手門学院は太田地区の東芝工場跡地に進められている茨木スマートコミュニティプロジェクトに参画し、2019年春に新キャンパスを開設。大学の地域創造学部と国際教養学部を移転するほか全学部1年次教育の拠点とし、中高を全面移転する）

「『学びのサードプレイス』を提供し、市の発展に貢献したい」と述べた。学びのサードプレイスとは大学を核として住民のみなさんと創りあげていくものだと具体的に説明。「5000人の学生生徒が通う新キャンパスでは、学生たちが学び合い、教え合い、主体的に学ぶ新しい教育を実践したい」と語り、学舎1階の大きな空間を学生が学び合える賑わいの場とし、知的好奇心を満たすサードプレイスとして①その一角に「地域連携スペース」を常設②図書館を開放③空き教室を子供たちの自習スペースとして提供——することなどを挙げた。「災害に強い街づくりにも貢献したい」とキャンパス内に地域の避難路を整備するほか、避難場所を提供する計画を明らかにした。「駅から新キャンパスに至る道路の拡幅を市長にお願いしたい。それができれば街が様変わりする」と語った。

## 参 加 者

質問票は①茨木のまちに望むこと②あなたをはじめ、市民ひとりひとりが取り組むべきこと——の二つを聞いた。

関心が高かったテーマの一つが福岡市長の問いかけ「高槻との比較」。「芸術文化ではやや負けていると思う。例えば高槻ジャズストリートのようなイベントを開催し、芸術文化の振興を図っていただきたい」「箱モノの有無や規模を競うのではなく、市民主体の自治力を高めていくことが高槻を超える起爆剤になる」という声があったほかは、「茨木は茨木であればいい」という意見が多数を占めた。主な内容は「高槻と違っていい。落ち着いた文化的な町であってほしい」「高槻に負ける、負けないではなく、茨木独特の街づくりでなくては。人まねはいやです」といったものだった。

参加者が最も注目したのは「サードプレイス」だった。「立命館、追手門新キャンパスなど教育・学生の町になるのが面白いのでは。京都も学生の町ではあるが、『地域に開放された』という特色はなかったように思う。茨木が先駆的に実践できれば強みになる」「市民と学の連携に期待する」と「学びのサードプレイス」に関する意見があった。さらに、市民会館を軸にサードプレイスとしての中心市街地の整備を望む声も。「市民会館を市のヘソである今の場所に早期に建設してほしい」「阪急茨木市駅とJR 茨木駅間の魅力ある沿道づくりを望む」「川端康成文学館をもっと多くの市民に利用してもらおう。元茨木川緑地は『川端康成』と合わせての活用方法を考えるべきだ」など魅力アップ、賑わいづくりを要望した。

「道が狭く渋滞が多いなど交通環境が悪い」「JR 茨木駅前に活気がない」という指摘も多かったが、市を高評価する市外からの参加者もいた。「大学があつて、鉄道が2本あつて、歴史があつて、新しい工業団地もある。すごい街であり、伸び代がある」と書いた。

「あなたが取り組むべきこと」に対する回答を読むと、市民の意識の高さがうかがえる。「市民意識を高く持ち、茨木を好きになれることが大切」「茨木のことを知り、市外へ発信する」「一人一人が地域に愛着を持つ」。「暮らしの中で思った不満、いい点、改善してほしい点をできるだけそのまま市長や職員に伝える。市の方針を理解し、できるだけ協力する」「地域や集団の中で自らの意見を述べる必要がある。市政に対しても」など、自分の考えをしっかりと持って声を出していくべきだという意見も目立った。

## 参 加 学 生

提出されたレポートから主な意見を紹介する。

### 1. 学びのサードプレイス

「新キャンパスに子供と高齢者が学び、教え合う場所を設けたい。茨木市の歴史、郷土文化を知っているのは、そこで生活している高齢者、つまり地域住民ではないだろうか。高齢者が生きがいを持たず、精神的に思うことも少なくない。子供と高齢者が交流することで教育効果が見込まれるとともに高齢者の心も元気になると考える。そこに大学の研究者や学生が力を貸すことで相乗効果が生まれるだろう」

「公民館や町の図書館など市民に開かれた快適で安心できるスペースのような作りで、新キャンパスを通じて市民同士の距離が近くなり、生産的な活動に取り組めるようになればと思う。街づくりへの提言は『市民の知的好奇心が生む茨木市の発展』。市民が自主的に主体的に活動することが大切だ」

「新キャンパスは JR 新駅の徒歩圏内にできることで若者が増え、活性化につながる。食堂や図書館を市民の方々が自由に利用できることで、市民と学生の交流が生まれ、街がフレッシュになると思う」

### 2. 川端康成

「茨木市で育った『川端康成』を全面に押し出して教育をもっと豊かにする。康成と茨木の関連をもっとアピールしていくことが大切だ」

「先日、川端康成文学館を授業の一環で訪ねたが、人が少なく、不気味な感じさえした。市長が市としての個性に乏しいことに触れ康成を PR すると述べていた。私は、文学館で毎月、康成ゆかりの地を巡るスタンプラリーといったイベントを開催するなど、地域外の人々とコミュニケーションを図ることが重要だと思う」

### 3. 誇り

「市民が誇れる街をつくるのが一番だと思う。誇りを持てなければ他市の人に茨木の魅力を説明できないからだ。誇りを持つことが『次なる茨木』につながる」

### 4. 駅前・歩道

「駅前が寂しい。JR 茨木駅は離れたところにイオンモールがあるが、それ以外にこれといったものはない。駅前でももう少しイベントを開いたりみんなが集まれるような場所をつくったりすることで人を呼ぶことが大切だ」

「歩道が狭い。小さい子供を連れて歩くのは大変危険。歩道の整備も気にかけてほしい」

## コーディネーターを務めて

想定していたシナリオ通りとはいかず、ハラハラしたが、むしろそれによって闊達なシンポジウムになったのではないと思う。感心させられたのは参加者の意識の高さである。「他市のまねではない、茨木らしい文化的で落ち着いた街づくり」を望み、質問票の項目の一つ「市民ひとりひとりが取り組むべきこと」に対する記述をまとめれば、「市民ひとりひとりが自分の考えを持ち、声を上げ、行政の考えを理解できれば協力する」となる。パネリストの発言と考え合わせると、街づくりのキーワードの一つが見えてくる。

「第3の居場所」（サードプレイス）である。第1の居場所（家庭）、第2の居場所（職場、学校）のほかに、コ

コミュニティの核となるサードプレイス。福岡市長が市民会館の建て替え・跡地利用事業のコンセプトとして示し、川原理事長・学長も新キャンパスの重要な機能として打ち出している。居心地が良く、にぎわいのあるサードプレイスを広げていくことが都市の魅力を高めることにつながり、「住み続けたい」「住んでみたい」茨木をつくり上げていくという考え方である。

市民会館の建て替え・跡地利用事業がその試金石になるかもしれない。場所は「茨木の顔」とも言える中心市街地。市民会館跡地、人工台地、南北のグラウンド、さらに元茨木川緑地、茨木神社があり、少し北には川端康成文学館がある。構想では、新しい市民会館は従来のホール機能に加え、子育て支援の機能を持たせて日常的に多くの市民が集う複合的な施設を目指す。周辺エリアは憩い・交流・賑わいの場として整備するという。行政と市民が対話しながら、前例にとらわれない街づくりが進むことに期待したい。



2018年に茨木市が市制70周年、  
茨木商工会議所が創立70周年、  
追手門学院が創立130周年を迎えることを記念し、  
福岡洋一茨木市長、合田順一茨木商工会議所会頭、  
川原俊明追手門学院理事長・大学長が、  
2019年に追手門学院大学の新キャンパスが  
開設される総持寺地区を含めた茨木市の  
未来について大いに語り合います。

参加無料

IBARAKI CITY

# 次なる 茨木 へ



産官学連携シンポジウム



次なる  
茨木へ。  
2019年・2020年  
平成30年は市制施行70周年



現代未開 追手門  
130年の伝統を未来のために



70th  
ANNIVERSARY

|          |                                                              |
|----------|--------------------------------------------------------------|
| 開催日時     | 11月18日(土)14:00～                                              |
| 会場       | 茨木市立男女共生センター<br>ローズWAM ワムホール                                 |
| 定員       | 150名(申込み先着順)                                                 |
| パネリスト    | 福岡 洋一/茨木市長<br>合田 順一/茨木商工会議所会頭<br>川原 俊明/追手門学院理事長・追手門学院大学長     |
| コーディネーター | 泊 吉実/追手門学院大学 北摂総合研究所長                                        |
| 問合せ先     | 追手門学院大学 研究・社会連携課 / TEL:072-641-9723 MAIL:campus@otemon.ac.jp |

後 援

茨木市教育委員会、茨木市自治会連合会  
茨木市観光協会、茨木市住みよいまちづくり協議会  
茨木ロータリークラブ、茨木東ロータリークラブ  
茨木西ロータリークラブ、茨木ライオンズクラブ  
茨木オークライオンズクラブ  
茨木ローズライオンズクラブ  
茨木ハーモニライオンズクラブ

一時保育あり  
(有料)

1才～就学前まで  
一時保育の申込は11月9日(木)まで



大阪府  
Ibaraki City



想像もしなかった自分史がはじまる  
追手門学院大学



茨木商工会議所  
The Ibaraki Chamber of Commerce & Industry